

森林と社会

山田 勇

今日は東南アジアの森林の特色は何かということ述べ、その中で人間社会のあり方を探ってみたいと思う。結論を先にいうと、東南アジアの森林は気象条件や地形、土壌などのミクロな差によって、非常に多様な世界が展開される群島に成立した森林といえる。そこには中規模河川が流れ、フタバガキ科の樹種群が重層構造を成し、きわめて優れた生態空間を作っている。そして、その生態空間には非常に資源量が多いということが東南アジアの森林世界を考える時の基本線になっている。この背景を元に人間というものを考えてみると、人が大変動きやすいことになる。つまり、群島であり、河川交通が非常に発達しているため、人の行き来が非常に盛んである。人のいき来が何故あったかという、交易物資に非常に珍しいものがあり、しかも数が多かったからである。その結果、交易中心の世界が東南アジアのかなりの部分に行き渡ったということが言える。

東南アジアというとすぐに農業と言う人がいるが、農よりも商人の意識の方が際立っているのではないと思う。今も特に港では情報交換の場として、非常に自由な雰囲気が見られたりする。

次にこういった東南アジアの特色をまずボルネオを例にとり、次に比較の対象として、南米、日本をとり挙げ、結論に持っていきたいと思う。

島嶼部東南アジアの森林タイプを見てみると、低湿地では泥炭湿地林がよく発達し、樹高70mくらいの大きな木が出てくる。サラワク、ブルネイの泥炭湿地林ではアラン (*Shorea albida*) という優占種がずば抜けて大きく、それ以外は非常に小さい。低湿地から陸に上がって土壌条件が少し良くなると、非常に複雑な垂直構造になってきて、標高1500mあたりまで、混交フタバガキ林が優占する。この森林型の中で、現在、伐採が進んでおり、突出した大木を切り出している。1500mから上には山地林が見られる。ここの代表的な樹種をとって、葉っぱの層がどこに分布しているかを高さ順に区切って調べると、標高の低い方で優占する種や、標高の高いところのみ出現する種などが重なり合ってひとつの社会を作っている。実はこれが今日の話のポイントの一つであって、アジアの熱帯とその社会はこういう重層構造であるという捉え方をしたらどうかと私は思っているのである。

世界第三の島で、ちょうど東南アジアの中心に位置し、世界でも最も多様性の高く、大きな資源量を持った森林が存在するボルネオ島を考えてみよう。私はブルネイでJICAの仕事をし、最近、サラワクやカリマンタンを見てきている。中部カリマンタンの中にバリト川という大き

な川があるが、この下流域、中流域、上流域の話をしてみたいと思う。カリマンタンでは川の生活が主体になっていて、丸太材や竹を束ねた上に家を浮かべて商売をしている。一般人もそういう家に住み、川筋ですっと生活を営んできた。現在下流域の大都市周辺では、製材工場があり、上流から運ばれてきた材木をここで製材したり、合板にして輸出している。

最初に述べたように、河川の交通が非常に発達していて、上流に行くには乗合タクシーのような大小の船が行き来し、活気のある風景を展開している。川を上って行くと、沿岸にはロタンを干したり、ロタンの表皮を取っている作業が見られる。ロタンは森林産物としては最も大事なもので、下流に集荷し、製品化して日本に輸出している。他に砂金やダイヤモンドをポンプを使って大がかりに採掘しているところも見られる。中流域のカリマンタンは、地図で見るとほとんど道がないが、実際に行くと、もともと木材会社のコンセッションが作った道が、現在は国道に転換されて継続して使っている。地元の人はこちらを利用して陸上交通を行っていて、これからは河川交通が徐々に衰え、いずれ陸上交通の世界になるだろうという地域もかなり見受けられた。

急流を上り、険しい山を登って行くと山の民の世界になり、非常に古いしきたり等が保存されている。上流の小型森林産物で有名なのは沈香である。中には沈香だけを採って生業にしている村もある。一番上流へ行くと狩猟採集民のプナンがいる。彼らは焼畑もやっているが、常に犬を5～6匹連れ、槍を持って森で豚や鹿をとっている。村落の周辺には果樹が非常に密に生え、山のほうへ行くと天然林が残されていてモザイク的に非常に安定した景観がみられる。

次は、南米のベネズエラの南部の話だが、ここには日本の半分くらいの面積の中に森の民が8万人ばかり住んでいる。アマゾンに行ったとき最初に感じたのは、川が大きすぎるということ。中流でも幅が10キロとか20キロもあり、常に水の害を受けている。雨が降ると森林の中に浸水し、なくなるときは一遍に退いてしまうので、森林もさほど大きいものはない。川が大きすぎると人の行き来もうまくいかないのではないかと思う。それに比べると、東南アジアの森林は適正規模であるという印象を受けた。ベネズエラの政府は、森の民を守るために徹底した方法をとっていて、東南アジアでやっているようなプランテーションのようなものは一切やらず、あくまでも森の民が自力で生活できる場を確保するというを考えている。従って外部者にはきわめて厳しい規制があり、エコツーリズムも歓迎されない。それに比べてエクアドルでは逆にエコツーリズムを奨励し、石油に次ぐ国家収入になっていて、非常に大事な生業になりつつある。

次に日本の例を挙げてみたい。日本と東南アジアというのは類似点が多いが、日本の特色を

あげると、一つは、林業が先進的であるということである。特に京都の北山は非常に集約的な林業をやっているのが有名な所である。ここでは天然しぼという、材の表面がでこぼこしたものが特産品になっている。これが売れるというので、大正の中頃に吉野と北山の両方で開発が行われた。この作業は世界にも例のないくらいきめ細かいもので、その結果、普通の杉よりも高く売れる。そうすると、1本の値段が高い分、伐採面積も少なくすむ。年間0.2ヘクタールくらいの木を伐れば、十分やっていけるということがいえる。これは林業という本来粗雑な生業を集約化し、美的に優れた物を作り出したという珍しい例である。東南アジアのことを考えてみると、いまだに林業は粗雑な扱いである。東南アジアの人が北山を見るとびっくりしている。彼らはこれをそのまま自国の林業に当てはめるのではなく、何か新しいヒントを得たいと考えているようである。

日本は各地にいろんな森林をとりまいて小さな生業がある。これらの特徴の一つは、市場がそれほど大きくないということである。北山杉は京都周辺の関西文化圏を背景に成り立っていて、他の県で真似をしてもうまくいかない。このような建築様式を要求する都市が無いからだが、東南アジアでもこの点については、考えなければならないことだと思う。東南アジアで材木を出すと、いつも輸出用ということになるが、もっと地域内で回るような市場性を持った物を作る必要があるのではないかと私は考えている。また、日本は山の神も居るので、これも類似性という点では非常に考えやすいかと思う。

結論になるが、最近地中海あたりへ行行って石の文化や砂漠の文化も少し見て来たのだが、どうも柔軟性が無い。石の建築は確かに立派だが自然が作ったものに比べたら大した事が無いという気がして帰ってきた。やはり砂漠とか草原は、森林に比べると単層社会である。森林はそれ自体優れた重層空間で、その間にマイクロな多様性がある。森林資源と社会の関係をみると

「狩猟社会＝下層との一体化」

「焼畑社会＝中層の合理的利用」

「現代社会＝上層の略奪」

という三つに分けることができる。狩猟社会というのは、森林の中の下層だけを取り上げて、下層との一体化がずっと行われてきた。焼畑社会は森林で言うと、ちょうど中くらいの木をあつかい、中層の合理的な利用をはかってきた。現代の社会は何をやっているかと言えば、結局、一番大きな木の略奪をやっているだけではないのか。森林資源というのは地球上で唯一再生のきく資源であり、これをあまりへたな使い方をすると具合が悪くなると思う。

我々は、森と人が共存する社会とはどんな社会なのかを考えているわけだが、それはまず実

利的な社会だと思っている。また実利的でない生きていけないギリギリのところで生活している。このような生活を維持していくためには、当然現場というものを保全しなければならない。また今までもそうだが、これからの社会でもますます重要になるのは交易であろう。そして最近の傾向として、エコツーリズムが無視できないものである。その時に現場の保全をどうするかであるが、人がそこで生きて行くためには、原生林だけでは具合が悪い。そこにはいろんな生態空間を持ったモザイク構造みたいなものを創出する必要があるのではないかと思う。全体的に見ると非常に優れた垂直構造を持つ社会が、人間の手によって上下左右様々なモザイク構造になって安定した社会ができた時、おそらく地域の人も、森の人も安定した調和した生活が続けられていくのではないかと私は考えているわけである。

コメント

運 沢 克 也

私はスラウェシからほとんど出たことがなく、山田さんが話された世界の熱帯林地帯のすべての範囲についてコメントすることはできないが、サゴヤシに依存した社会に入り込んで、そこでのサゴ生産プロセスの改良を目的とする工場の建設・操業等、多少実践的なことに関わりながら、その住民が森林をどう考えているかに関心を払ってきた。そうした経験に基づいて、コメントさせて頂きたい。

今、熱帯林問題では「保存すべきか、利用すべきか」という議論はもう終わっていて、「具体的にどうすべきか」という段階になっている。熱帯林の多様性の保全、遺伝子資源の確保などの要請の中で、その森の周辺の人々をどう位置づけ、それを具現化させるための案とその実行が求められている。例えば、対象地域をコアとバッファーに分けて、コア部分には狩猟採集だけを認め、バッファー部分では伝統的な耕作は認め商業的な伐採を禁止するとかいう具合だ。

しかし、そういう政策の背景にある「種の多様性の保護」とか「遺伝子資源の確保」とかいう概念はすべて「森」の外部からきているという問題があると思う。

山田さんの結論部分の「重層空間」とか「モザイク性」というあたりも同じことがいえる。私が気になるのはこうした外部からの要請と森の周辺で生活している人の立場とをどう擦り合わせていくかということだ。

そこで私なりに地域というものを考えてみたい。まず森が伐られつつある状況があり、森を

ある程度確保しながら、周辺の生活をどうすればよいのかということ、周辺の社会の関連を認めた開かれた系で考えてみる。中南米の例に出た閉じられた系、ある種の囲い込みで彼等の生活を保障してゆくという方法は、森林は保護されるかも知れないが、森の中の住民が弱者になってしまい、新しいことや面白いことが生まれてこないような気がしてしょうがない。

そこで、先ほどの状況設定の中でそれぞれの地域で二つぐらいの改良案を出してみる。一つはその地の主要な生業の改良である。食糧、収入源の確保がまずあって、森林内部への侵食を防げる。また、住民が保持している森との関わり方の知恵を引き出すことができるであろう。こうした改良は適正規模で、しかも彼等の自信につながるようなレベルで行うことが必要だ。また、彼等が扱う森林産物なり他の製品の品質改良を試み、流通のイニシアティブを確保する工夫も必要になるだろう。

もう一つは文化的なバックアップである。その地域の誇り、その地域への愛着を助長するようなバックアップが必要だ。私に関わっている南スラウェシのルウ地方を例にとれば、文化的にそこは神話の世界だ。ルウの神話を語る舞台のようなものを新たに作り、森を背景にしてそれを聞くようなことをしてはどうか。ここでは、森を守ろうとした「現代の英雄」の創作神話が生まれるかもしれない。森への「畏れ」、「敬い」などの彼等の意識に基づいて、何の為に、どういう森を守ろうとしたのかをかれらの言葉で語り継ぐことができたらいいと考えている。

これらの改良案を熱帯林問題が生じている個々の地域で出してみたらどうか。出し合った上で、共通性なり、また、地域ごとの全然違う解決策が見えてくることがあるだろうと思う。ボルネオとスラウェシは違うんだといったものが見えてくるかも知れない。そういう改良案をリストアップして、その上で地域というものを考えたらどうかと思ってる。

私の言いたいことは現実の社会に様々に生起している問題に具体的にコミットするような形で地域を考えるべきだということだ。その際に、単なる技術改良だけでなく、地域への愛着をバックアップする文化的な援助も、住民を主人公にしながら平行して考えるべきだということだ。

質疑応答

高村泰雄 結論部分で理解しにくいのは、「現代社会の上層の略奪」というところで、これはむしろ「全層の略奪」という気がする。植物学的なキャノピーのことをおっしゃっているとすれば、このあたりをもう少し説明し

て頂きたい。

山田 最後の三つの仕分けは、わかりやすく考えたらどうなるかと思ってあえて三つに分けてみた。現代社会が要求している材木、特に熱帯材というのは上層を形成する一番大き

な木で、直径で言うと60cm以上。それをどんどん伐るために、下層と中層が完全につぶされるというようなもったいない利用の仕方をしている。それに比べて、焼畑社会というのは二次林で、中層のあまり伐るのに労力がいらぬ資源を繰り返し利用するために、非常に合理的である。狩猟社会は、もちろん上層のキャノピーで鳥を捕ったりもするわけだ

が、キャパシティとしたら、やはり森林でいうと下層と一体化し、非常に調和的な空間を作っている。そういうふうを考えればわかりやすいと思って言っただけで、確かに「上層の略奪」と言ったら何か分からず、「上層木の略奪」と言った方が良かったのかもしれないと思う。



西ジャワのハヌムン地域にて